

漢訳『大日経』の註釈書成立に関する一、二の問題

真野新也

一 問題の所在と方法論

漢訳『大日経』（以下、『大日経』）の註釈書に多くの類本が存在することは、人口に膾炙されている。⁽¹⁾ その様な中で、一連の註釈書の内容を考察するに先立ち、諸本の成立を検討することは、全てに先立つ重要な作業であると言える。『大日経』の註釈書成立に係わる問題は、既に多くの先学によって成されているものの、歴史性を重視した場合、若干異なる結論が導き出されるのである。そこで小稿での視座を示すため、方法論を提示し、それに基づき具体的な考察に移りたい。

方法論として、第一に編年というものを重視していく。したがって、後代に付与された意義や価値観、すなわち、遡及的視点からの評価を行うことは避けたい。第二に、中国で記された書誌情報を重視し、そこで言及のない文献は、書誌不明のものとして、成立年代の推定は見送る。以上の二つの方法は、考察の窓口を閉ざすように理解されるが、『大日経』の

註釈書成立における正確な分析の枠組みを提供するものとなる。また小稿では、統天台宗全書、密教1『大日経義釈』（以下、『統天全』）に基づき諸本の成立過程を勘案していく。つまり、現存する文献のみを用いての考察となる。⁽²⁾

二 書誌情報の問題

中国で著された文献に認められる『大日経』の註釈書に関する言及は、『大日経義釈序』、『大日経序』、『両部大法相承師資付法記』に存する。以上における記述箇所を示すと次の通りとなる。

『義釈序』

次^レ文刪補、目為^二義釈^一、勅成^二二十四卷^一。⁽³⁾

『大日経序』

重請^三三藏和上敷^レ暢厥義^一、随録撰為^二記釈十四卷^一。⁽⁴⁾

『両部大法相承師資付法記』

沙門一行既伝教已、造^二大毘盧遮那義^一七卷⁽⁵⁾。⁽⁴⁾
成^レ分^二為^一十四卷。

右記の諸文献から、書名にこそ違いはあれ、全てが七巻か十四巻で『大日経』の註釈書が編纂されていたことが書誌的に確認され、七巻本と十四巻本とを中心に検討し、成立順序を推定することが合理的となる。これ等に該当する文献を『統天全』に求めれば、③七巻本『大日経釈義』と④・⑤十四巻本『大日経義釈』（以下、『釈義』、『義釈』）とが当て嵌まる。そこで、この二本を中心に問題を検討し、複数の文献が存在する理由と、成立の過程とを勘案していきたい。

三 『釈義』と『義釈』住心品での異同

住心品（『義釈』巻一に相当する箇所）を扱う意義として、その經典、及び註釈書全体における重要性もさることながら、文章全体の体裁が殊に整理されていることが挙げられる。つまり、然る状況で見出される文言の差異にこそ、述作過程がより積極的に見出されるのである。そこで小稿では、三つの視座から考察を行い、それぞれに二、三の例を取り上げる。

第一の視座は、『釈義』の文言が『義釈』より明瞭な場合である。このような実例は住心品において一番少ない。まず『義釈』が「梵云薩婆若那、即是一切智智。」と記すのに対して『義釈』は「梵云薩婆若那、若那即是一切智智。」とする文章がある。言うまでもなく、『義釈』での「若那」の漢訳は、不自然であると言わざるを得ない。また、他の箇所では『釈義』

が「亦不作是念。」とし『義釈』が「不亦作是念。」とする。⁽⁸⁾この場合、『義釈』には詠歎の助辞が付されるべきであり、文脈においても詠歎の意義が見出されることはない。さらに、『義釈』に現行経文と異なる文章が確認されることもあり、『義釈』が「奮迅示現無量莊嚴藏。」とするのに対し、『釈義』は「奮迅示現無尺莊嚴藏。」と、経文との一致を見せる。⁽⁹⁾

第二の視座は、『釈義』と『義釈』とで文言が相違するものの、良否の判定が困難な場合である。初めに、住心品冒頭からの文章で『釈義』が「究竟諸法実相三昧、円明無際而無所増。」とし『義釈』が「究竟諸法実相証時、円明無際而無所増。」とする。⁽¹⁰⁾これを書下せば、前者が「諸法実相三昧を究竟せば、円明無際にして増す所なし。」となり、後者は「諸法実相を証時に究竟せば、……。」となる。この場合、両文献で若干異なる内容を示すが、共に通意の文章である。続いて、『義釈』で「著保化城与滅度想。」とし『義釈』では「染著化城与滅度想。」としている箇所がある。⁽¹¹⁾ここで問題となるのは『義釈』の「著保」という動詞であり、このような表現は極めて稀なものであるが、それを以って否とすることは憚られよう。最後に『義釈』が「以一切種観一切法。」とし、『義釈』が「以一切種智観一切法。」とするものである。⁽¹²⁾これ等の文言は恐らくは、『大智度論』の「今以一切智慧門、入一切種観一切法。是名一切種。」⁽¹³⁾に基づく説示と推測されるが、両文献

漢訳『大日経』の註釈書成立に関する一、二の問題（真野）

とも『大智度論』での原意と若干異なる。以上の様な両文献における良否の判断が困難な文章は、全異同の八割を占めている。

第三の視座は、『釈義』に未整理、『義釈』に整備された場合である。ここで先ず取り上げるのが、三句法門に関連した以下の記述である。

『釈義』

欲入菩薩位故、於此真言法要方便修行得至初地。爾時以無所住進心不息為滿第二地。故復依真言法要方便修行得至第三地、「爾時以無所住進心不息、為滿第四地。故復依真言法要方便修行得入五地。」如是次第乃至滿足十地。

『義釈』

欲入菩薩位故、於此真言法要方便修行得至初地。爾時以無所住進心不息為滿第二地故、復依真言法要方便修行得入三摩地、「ナシ」如是次第乃至滿足十地。⁽¹⁴⁾

ここでは『釈義』の文章には重複があるのに対して、『義釈』ではそれが省略され、体裁が整えられている。解釈の必要性を孕むのは、『義釈』での「得入三摩地」であるが、この三摩地を大悲胎藏發生三摩地と見做せば、内容的に問題点を見出す余地はない。するとやはり、『義釈』に整理の形跡を認めるのが妥当となる。続いて、『釈義』では「梵云娜衍亦名為行亦名為道。」⁽¹⁵⁾とし、『義釈』では「梵云娜衍亦名為道。」とする文章である。⁽¹⁵⁾注目すべきは、「娜衍」の意義にあり、「娜衍」は

本来「乗・道」の意味を有するものであるが、『釈義』は「行」と記している。一方の『義釈』では、その「行」を消去し、「道」の義のみに留めている。換言すれば、『義釈』は整合性のない字釈を取り除き、文義を整えているのである。

以上を総合的に考察すれば次の通りとなる。第一に、『釈義』と『義釈』の両文献において、未整理の文章が確認され、『大日経』の註釈書に、二度に及ぶ撰述があつたことを示唆している。しかし、両文献での差異は、住心品の該当箇所において僅かなものであるため、述作に当たっては、一方の文献から継続して、他方の文献が成立したと見立てるのが合理的となる。このような見解は、長部和雄氏によって提示された、二度の訳経があつたという推測と類似するものである。⁽¹⁶⁾恐らくは、講経という機会をもつて、註釈を中心とした訳経が行われたとする可能性も、近年の研究成果から付度されるところであり検討を要するものである。⁽¹⁷⁾第二に、『釈義』と『義釈』との間での文言の異同は、右で考察した範囲において、約百十個見出され、またこれ等は『釈義』と『大日経疏』（以下、『疏』）とに共通するものである。したがって、住心品の該当箇所にあつても、『釈義』と『疏』とは同系統に位置づけられる文献であると、評価できよう。しかし、『釈義』と『疏』との前後関係を明らかにすることは、ここでは不可能であり、二度の述作の機会があつたことのみを指摘するに留める。

そこで、残された問題を解決すべく、『釈義』と『義釈』の世間成就品、悉地出現品を中心に検討したい。

四 『釈義』・『疏』・『義釈』世間成就品、悉地出現品 (途中迄)での異同

世間成就品と悉地出現品の途中までを中心に勘案する理由は、従来、『義釈』系統と『釈義』を含む『疏』系統との大幅な差異が指摘されている箇所であることに依る。そこで当節では、前節において『釈義』と『疏』とが住心品においても、或いは管見の限り住心品以降、世間成就品以前においても、同系統と確認されるため、先ずはこの二文献での差異を確認し、続いて『釈義』と『義釈』との異同、及び両文献の前後関係を考察していく。

はじめに、『釈義』と『疏』との前後関係を考察する。『大日経』の註釈書、特に秘密漫荼羅品以降に、諸本共通して多くの未再治の経文があることは、周知の事実となっている。そこでこの事実に着目し、分析することにより、諸本の前後関係を明らかにしていく。先ず取り上げるのは、『釈義』に経文が引用されることはなく、『疏』ではそれが補填されている場合である。当該の実例は、考察該当箇所において七箇所を確認される。一例を挙げれば、次の通りである。

『釈義』ナシ

『疏』中置字句等而想浄其命。

『大日経』中置字句等。而想浄其命。⁽¹⁸⁾

つまり、『釈義』では註釈文から文章が始まる訳であり、そもそも何れの経文に対する註釈なのか、不明瞭であることは言うまでもない。続いて、『釈義』と『疏』とで、それぞれ掲載する経文が異なる事例である。

『釈義』得観察一切願、満足三世無量法門決定智。満足故法句説者

『疏』復観諸大衆会、為欲満足一切願故。復説三世無量法門決定智

円満法句者

『大日経』復観諸大衆会。為欲満足一切願故。復説三世無量門決定智⁽¹⁹⁾円満法句

ここでは単に異なる経文が引用されているという訳ではない。右記の文章から言えるのは、『釈義』では現行の『大日経』成立以前の漢訳経文、すなわち、潤文の施されていない経文が記載されていると見るのが合理的であり、そこに両文献の前後関係が明瞭となるのである。このような性質の事例は、二十箇程確認され、一連の異同の中で最多となっている。以上の問題の類型で、数は少ないが、註釈書内の経文において、再治・未再治には分類されない、単なる文章の混乱と見做すべきものもある。

漢訳『大日経』の註釈書成立に関する一、二の問題（真野）

『釈義』作一落又……善住菩提心者。

『疏』善住一落又……初字菩提心者。

『大日経』善住一落又。初字菩提心者。⁽²⁰⁾

再度『大日経』での経文と並行して勘案すれば、『釈義』の文言、特に「作一落又。」は、雑駁な文章と評価せざるを得ない。斯様な混乱の原因を解明することは不可能であるが、相違の性質上、講経、或いは註釈書の著述において、訳語宝月の翻訳を、一行が私見を挟むことなく書写した結果と考えることも、見当外れとは言い難い。

さて、『釈義』と『義釈』との関係に立ち戻れば、ここにも類例が見出される。そこで考察の便宜上、既述の『釈義』・『疏』で比較した文章に相当するものを検討する。はじめに、現行経文の「中置字句等。而想浄其命。」⁽²¹⁾に係わる『義釈』のは、『疏』と同様に経文が補われていることが確認される。また、『大日経』で「復観諸大衆会。為欲満足一切願故。復説三世無量門決定智円満法句。」⁽²²⁾とし、『釈義』で「得觀察一切願、満足三世無量法門決定智。満足故法句説者。」⁽²³⁾とされる引用経文は、『義釈』にあつては「爾時世尊以普遍加持眼、復観諸大衆会、知已堅牢深浄堪持大法、満一切願故、復説三世無量門決定智円満法句。」⁽²⁴⁾であり、現行の経文と異なる文章であるが、傍線を付した部分を除外すると、内容上の大差は認められない。

右を包括的に評価すれば、やはり、『釈義』は『疏』や『義釈』に先んじて成立した文献と位置づけるべきとなる。また、『釈義』に『大日経』の経文が引用されるに当たっては、しばしば大正蔵『大日経』の経文と異なるため、前節での考察を踏まえれば、『釈義』は最初の講経の筆記であつたと見做せるのである。

五 小結

小稿は、書誌情報の明らかな『釈義』と『義釈』とを中心
に検討した。まず、住心品を検討したことによって、『釈義』
と『疏』の文言の類似が多く、また、共通して『義釈』とは
異なる文章であることが確認された。したがって、『釈義』と
『疏』が同系統に位置づけることが合理的となると判断した。
また、『釈義』と『義釈』において、ともに読解に困難な文章
が認められたのであり、その示唆するところは、住心品にお
いて『釈義』と『義釈』の成立関係を明示することはできな
いものの、一行による註釈書の作成に、二度の機会が存した
のではないかということである。そこで、文献成立の前後関
係を分析するため『釈義』・『疏』と『義釈』から、世間成就
品と悉地出現品の途中迄に示される引用経文から、現行の大
正蔵『大日経』のそれと比較検討した。その結果、『釈義』の
引用経文には、文法上の問題に基づいた、解読に困難な文章

が多出するため、小稿は『釈義』をもって、最古の漢訳『大日経』の註釈書と見做すべきと考える。

- 1 先行研究に、長部和雄『一行禪師の研究』、清水明澄『大日経』の注釈書の書誌学的研究、同「唐土における『大日経』注釈書の研究」がある。また、小稿が依った『統天全』に関するものに清田寂雲「大日経義釈の校合を終わって」がある。なお、諸写本の閲覧にあたり、天台宗典編纂所の藤平寛田氏、仁和寺管財課の朝川美幸氏、青蓮院の東伏見光晋氏のお世話になった。
- 2 先行研究の多くが、最古の註釈書に『義釈』の原型という存在しない文献を想定している。

- 3 統天全、密教1・i下。
- 4 統蔵一―三六・二七丁右。
- 5 大正五一・七八六頁下。
- 6 七卷『釈義』と十四卷『義釈』の配卷は、『義釈』の奇数卷冒頭で一致する。つまり『釈義』は『義釈』を合じ、或いは『義釈』が『釈義』を開いた文献であると言える。
- 7 統天全、密教1・一七頁下。
- 8 統天全、密教1・二〇頁上。
- 9 統天全、密教1・一三頁下。
- 10 統天全、密教1・三頁上。
- 11 統天全、密教1・一二頁上。
- 12 統天全、密教1・一〇頁上。
- 13 大正二五・一三八頁上。
- 14 統天全、密教1・一六頁上。
- 15 統天全、密教1・一八頁下。

漢訳『大日経』の註釈書成立に関する一、二の問題(真野)

- 16 長部和雄『一行禪師の研究』二〇―二四頁参照。
- 17 船山徹『仏典はどう漢訳されたのか』五六頁参照。
- 18 統天全、密教1・三六〇頁下、大正一八・一七頁下。
- 19 統天全、密教1・三七九頁下、大正一八・一七頁下。
- 20 統天全、密教1・三五三頁下、大正一八・一七頁中。
- 21 大正一八・一七頁下。
- 22 大正一八・一七頁下。
- 23 統天全、密教1・三七九頁下。
- 24 統天全、密教1・三七九頁下。

〈参考文献〉

- 長部和雄『一行禪師の研究』(神戸商科大学学術研究会、一九六三)
 清田寂雲「大日経義釈の校合を終わって」(『仏教文化の展開』山喜房仏書林、一九九四、二三三―二五〇頁)
 清水明澄『大日経』の注釈書の書誌学的研究」(『密教文化』二一九号、二〇〇七、二五―三九頁)
 清水明澄「唐土における『大日経』注釈書の研究」(『密教文化』二二一号、二〇〇八、四九―七二頁)
 船山徹『仏典はどう漢訳されたのか』(岩波書店、二〇一三)

〈キーワード〉『大日経釈義』、『大日経義釈』、『大日経疏』

(早稲田大学非常勤講師・PhD)